

原作／石牟礼道子

構成・演出・独演／井上弘久

音楽／吉田水子

作曲／金子 昶

独演

つばき うみ き 椿の海の記

語って演じる独演と
生演奏で
世界を想像する

上演時間 約80分

～もうひとつのこの世をもとめて～

物語の舞台は4歳のみっちゃん(石牟礼道子)が暮す昭和初年代(1930年前後)の水俣。常に弱者の側に身を置き、自己流の生きる哲学を語る石工の父・亀太郎。貧しいにもかかわらず、頼ってくる者をすべて受け入れて屈託のない母・春乃。しょっちゅう町筋を徘徊する盲目の老狂女の祖母・おもかさま。みっちゃんを囲んでいる人々や、いつも行き会う町筋の人々、その人々が暮す栄町通りの様子や歴史、水俣の海に山に生きる生きものたちや神さまたちや妖怪たち、町筋で起こる事件や出来事など、昭和初年代の水俣の人々が生きる世界が、みっちゃんの目を通して描かれていく。どこか懐かしい匂いや色合い、肌合いとともに、記憶の底に沈もうとしている「もうひとつのこの世」が舞台によみがえる。



バーチャルリアリティーと呼ばれる映像やゲーム。より現実に近いリアルな世界を大人たちは子どもたちに提供し続けている。そこには子どもたちが想像や空想を膨らませる隙間はどこにもない。一見何もなかった貧しい時代は、手作りの玩具や独自の遊びを考案させ、子どもたちの豊かな創造力を育ててきた。昨今の様々な子どもの問題、いじめ、虐待、自殺、貧困…という数々の現実。これらは創造力=想像力の欠如が大きく関わっている。身近にいる誰かの傷みを感じ取り、喜びに共感し、哀しみを憂い、苦しみを見つめ合うことで、世界はまるで違った見え方をしてくる。なんの飾りもない素舞台上立つ役者の独演と生の音楽が紡ぐ劇の時間は、観ている子どもたち自身が感じ想像することで、鮮やかな演劇の世界を繰り広げてゆく。記憶から消えようとしている時代と、そこに生きた人々を見つめることは、想像力と感受性を育て、世界を豊かにしてゆく手がかりとなる。

かんじょうしきれぬうちにくたかれて、
死んでしまっけん、
それおしまいだ。



山になるものは
山のあひだち、
カラス女の、
狐女のちゅうひつこたちの
もじやるけん、
ひかえもいひ来

◆独演 井上弘久 (いのうえひろひさ)

1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場(太田省吾・主宰)に所属。名作「水の駅」[小町風伝]などで、日本および海外各都市の舞台を踏む。1990年より劇団U・フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始する。

♥演奏 吉田水子 (よしだみなこ)

東京藝大、桐朋学園大学研究科卒。躍動感あふれる伸びやかな演奏で、ラテン、シャンソン、タンゴ、映画音楽など、演奏と弾き語りでジャンルの垣根を超えて活躍している。井上とは2013年より朗読演劇での共演を経て、「椿の海の記」の音楽を担当している。http://www.minaco.jp/



お問い合わせ 吉田水子企画

TEL 050-3746-1566 FAX 050-3737-0238 E-mail minaco@cotori.jp
https://yoshidaminacoplanning.jimdo.com

吉田
水子
企画